『東京大学言語学論集』31 (2011.9) 187-196

淡路島方言における動詞のアクセント体系の地域差

中澤　光平

キーワード：淡路島方言　アクセント　単純動詞　複合動詞

要旨

淡路島方言のアクセント体系は，下げ核と高起，低起の2式から成る現代京都方言と同様の体系である。3拍2類の動詞は，淡路島北部では一般に高起無核型で現れるのに対し，中央から南部にかけて語頭の拍に核がある形で現れる。複合動詞は北部では無核型になるのに対し，南部では有核型のものが存在する。北部に見られる無核型は地理的に近い神戸市など京阪神のアクセントに，南部の有核型は四国の徳島市方言のアクセントにそれぞれ良く一致し，周辺地域との比較から北部では有核型から無核型への変化が起きており，それが神戸市などの変化と関係がある可能性を示した。

1．はじめに

図1　淡路島の地図

本論[1]では，筆者が2010年8月から2011年3月にかけて行った計6回の現地調査で得たデータを基に，淡路島方言[2]における動詞のアクセント体系について論じる。

淡路島は兵庫県に属する瀬戸内海で最東部かつ最大の島で，東は大阪湾，西は播磨灘，南は紀伊水道に面し，北端は明石海峡，南東端は紀淡海峡，南西部は鳴門海峡に面する。

現在の淡路島は北から淡路市・洲本市・南あわじ市の3市体制となっているが，1965年～2005年は1市10町であった。市町村合併により，淡路町・北淡町・東浦町・一宮町・津名町が淡路市，五色町が旧洲本市に合併し現洲本市，緑町・三原町・南淡町・西淡町が南あわじ市となった。図1には現在の行政区画ではなく，方言区画の基準として1市10町の時代のものを示した（太線は今の3市の区画）。江戸時代には徳島藩の所領だったが，明治4年に北部が兵庫県に，南部が徳島県に属し，明治9年には全島が兵庫県に編入された。

[1] 本稿の執筆に当たり，指導教官の小林正人先生ならびに助教の永澤済先生，平田秀先輩に貴重な助言をいただいた。深くお礼申し上げる。また，調査に協力してくださった地元の皆様にも厚くお礼申し上げる。
[2] 淡路島で話されている方言を本稿では淡路島方言と呼ぶ。沼島は南淡町の一部だが本発表では対象外とする。

2．調査方法

淡路島の地理的，歴史的背景から，淡路島方言は兵庫県と徳島県の方言の影響を受けていると考えられるが，本州に近い北部と四国に近い南部ではとりわけ違いが大きいと予想される[3]。そこで，淡路島内部での方言差を確認するため，旧行政区画 1 市 10 町を基準に，各地区で 60 代以上の生え抜きの話者に対し聞き取り調査を行った。筆者が用意した調査票に基づき，1 対 1 あるいは 3 人までのグループで主に筆者が話者に質問し，それに答えていただく形で調査を行った。アクセントに関しては調査票を読み上げていただいた。話者 1 人辺りの 1 回の調査時間は平均 2 時間弱，計 50 時間程度である[4]。

各地区の内訳は，旧行政区画ごとに，淡路 1 名（80 歳女性），東浦 4 名（63 歳男性，75 歳女性，80 歳女性，81 歳女性），北淡 2 名（69 歳女性，86 歳女性），津名 2 名（69 歳女性，86 歳女性），一宮 2 名（81 歳女性 a，81 歳女性 b），洲本 3 名（73 歳男性，83 歳女性，91 歳女性），五色 2 名（80 歳男性，94 歳女性），緑 1 名（78 歳男性），三原 1 名（71 歳男性），西淡 2 名（70 歳男性，77 歳男性），南淡 6 名（62 歳女性，63 歳女性，76 歳男性，77 歳男性，78 歳男性，97 歳男性）である（2011 年 6 月 21 日現在）。

3．名詞のアクセント体系

名詞は動詞よりも豊富な型が認められるため，淡路島方言のアクセント体系を名詞によって概観する。淡路島方言は現代京都方言と同様，以下の特徴を持つアクセント体系を有する[5]。

- 下げ核[6]/ ' /を有する（以下，下げ核を単に「核」と呼ぶ）
- 高起式/ ¯ /と低起式/ _ /の 2 式を有する

淡路島方言では，高起式の語は核が無い限り文節の最初から高く続く[7]。低起式は低く始まり核のある拍で上昇し，核が無い場合は文節末で上昇する。話者によっては核のある拍の前で上昇が始まることもある[8]。

核が無い場合，無核であることを示すために/ = /を付ける。

音調の型に対して，高起式を H，低起式を L で表し，核が語頭から何拍目にあるかを数字で

---

[3] 網宜田竜昇（1986）は淡路島北部が大阪・奈良に，中部が和歌山に，南部が徳島にそれぞれ類似するとしており，根拠の 1 つにアクセントの違いを挙げているが，各地域との具体的な対応は不明である。

[4] ただし，地域，話者によって調査項目，調査時間にかなりばらつきがある。3 拍動詞のアクセントの調査項目数は最多で 210 語，最少で 30 語であり，平均で約 50 語である（いずれも異なり語数）。

[5] 中井幸比古（2002: 12-14）。

[6] 次の拍の高さを下げる働きを持つ（上野善道 1992: 11）。拍はアクセントの長さを構成する単位である（上野 2006: 2）。淡路島方言では特殊拍も核を担うことができ，拍がモーラと一致する。ただし，促音「ッ」が核を担うことは稀である。本稿では，〇ッ（〇は拍）という音節全体が高く聞こえても，〇に核があると解釈する。

[7] ただし，筆者の調査した話者の多くは，単語言い切りの場合，2 拍目から 3 拍目にかけてわずかながらピッチの下降が聞かれることがあった（2 拍語では 1 拍目と 2 拍目の間）。言い切りによる文末のイントネーションの影響か，アクセントによるものかはさらなる調査が必要である。

[8] 高橋顕志（1982）では南部の福良（南淡町）にその特徴が見られるとするが，筆者の調査では東浦など北部の話者でも時として核の位置にかかわりなく 2 拍目から上昇することがあった。ただし，安定して 2 拍目で上昇するわけではない。また，福良でも 60 代では核のある拍で上昇するのが普通であった。

表す記号を与える。無核の場合は0とする。

1拍語から5拍語までのアクセント型を，東浦80歳女性の例によって以下に示す。

表1　淡路島方言の名詞のアクセント体系（5拍語まで）

	1拍語	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
H0	¯子(ー)=	¯ニワ=	¯サカナ=	¯クサムラ=	¯ワスレモノ=
H1	¯日'(ー)	¯イ'ヌ	¯チ'カラ	¯ア'サガオ	¯レ'ストラン
H2		(語例無し)	¯ムス'メ	¯サカ'ミチ	¯ケオ'リモノ
H3			(語例無し)	¯カミソ'リ	¯アワジ'シマ
H4				(語例無し)	¯コゼニイ'レ
L0	_手(ー)=	_フネ=	_ウサギ=	_ノラネコ=	_カクシゴト=
L2		_ヘビ'	_タヌ'キ	_クダ'モノ	_オト'ノサマ
L3			_マッチ'	_カマキ'リ	_クスリ'ユビ
L4				(語例無し)	_タヌキソ'バ

網掛けは理論上属する型が無いと思われることを示す。H5，L5型は5拍の場合理論上あり得るが，現在までの調査では確認できないため除外した。「語例無し」は理論上この型に属する語があり得るが，現在まだ見つかっていないことを示す。

表1の単独言い切りにおける具体的な音調は表2のようになる。[は上昇，] は下降，]] は拍内下降を示す。

表2　淡路島方言の名詞のアクセント体系の音調実現形（5拍語まで）

	1拍語	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
H0	[子(ー)	[ニワ	[サカナ	[クサムラ	[ワスレモノ
H1	[日](ー)	[イ]ヌ	[チ]カラ	[ア]サガオ	[レ]ストラン
H2		(語例無し)	[ムス]メ	[サカ]ミチ	[ケオ]リモノ
H3			(語例無し)	[カミソ]リ	[アワジ]シマ
H4				(語例無し)	[コゼニイ]レ
L0	手[(ー)	フ[ネ	ウサ[ギ	ノラネ[コ	カクシゴ[ト
L2		ヘ[ビ]]	タ[ヌ]キ	ク[ダ]モノ	オ[ト]ノサマ
L3			マッ[チ]]	カマ[キ]リ	クス[リ]ユビ
L4				(語例無し)	タヌキ[ソ]バ

1拍語は単独形では2拍分の長さで発音されるが，助詞が付いた場合は1拍分にもなり，H1型は [ヒ]ヤ[ノボッ]タ「日が昇った」 のようにも発音される。

また，L0 型の文節末の拍の上昇は，次に高起式の語が続く場合には消失し フニャ[デ]タ「船が出た」， ヨム[ト]キ「読むとき」 のような音調となる[9]。

n 拍語における Hn 型と Ln 型は，断定の助動詞「や」のような低く付く付属語が後続する場合 [日]ヤ，ヘ[ビ]ヤ，マッ[チ]ヤ となって H0，L0 の [子]ヤ，フ[ネ]ヤ，ウサ[ギ]ヤ と同音調になることもあるが， [日]ーヤ，ヘ[ビ]]ヤ，マッ[チ]]ヤ のように拍内下降や長形が現れ H0，L0 とは異なる形でも実現される。なお，南部一帯では拍内下降が ヘ[ビ]ーヤ のように 2 拍に引き伸ばされる傾向がある。

4．動詞のアクセント体系

4．1　単純動詞のアクセント体系

名詞においては，所属語彙に多少の違いはあるが，全島を通じ同様のアクセント体系が見られるのに対し，動詞のアクセント体系は淡路島内で違いが見られた。

まずは，淡路島全島を通じ共通して現れる動詞のアクセント型を終止形が 3 拍の語まで示す。

表 3　淡路島方言の動詞のアクセント体系（3 拍語まで）

	現在・終止	現在・連体	否定・終止	過去・終止	過去・連体
I	¯着ル=	¯キル=(¯ト'キ)	¯キン=	¯キ'タ	¯キ'タ (¯ト'キ)
V	¯置ク=	¯オク=(¯ト'キ)	¯オカン=	¯オ'イタ	¯オ'イタ (¯ト'キ)
I	¯入レル=	¯イレル=(¯ト'キ)	¯イレン=	¯イ'レタ	¯イ'レタ (¯ト'キ)
V	¯登ル=	¯ノボル=(¯ト'キ)	¯ノボラン=	¯ノボ'ッタ[10]	¯ノボ'ッタ (¯ト'キ)
V	¯居'ル	¯オ'ル (¯ト'キ)	¯オ'ラン	¯オ'ッタ	¯オ'ッタ (¯ト'キ)
I	_見ル=	_ミル=(¯ト'キ)	_ミン=	¯ミ'タ	¯ミ'タ (¯ト'キ)
V	_読ム=	_ヨム=(¯ト'キ)	_ヨマン=	_ヨンダ(')	_ヨンダ=(¯ト'キ)
I	_逃ゲル=	_ニゲル=(¯ト'キ)	_ニゲン=	_ニゲ'タ	_ニゲ'タ (¯ト'キ)
V	_歩ク=	_アルク=(¯ト'キ)	_アルカン=	_アル'イタ	_アル'イタ(¯ト'キ)

（I は一段活用の動詞，Vは五段活用の動詞であることを表す。）

現在・終止形は基本的に無核になっているが，「居る」のみ有核で現れる。ただし，「ン」が付く否定・終止形では [オ]ラン という有核形の他に [オラン も聞かれた。これは高起式の他の動詞の未然形が無核であるため類推が働いたと思われる。低起式五段活用動詞の過去・終止形では， ヨン[ダ]] のように語末に下降が通常現れるが，3 拍 L3 の名詞 マッ[チ]] や サッ[キ]] と異なり ヨン[ダ とも言い，高起式の語が後続すると ヨンダ[ト]キ「読んだとき」 のように上昇が消失するため，過去・連体形は _ヨンダ=¯ト'キ と解釈できる。終止形語末の核に類似した下降は，他の動詞の有核型の終止形からの類推か，有核型の古形が残存したものと思われる[11]。

[9] ヒヤ「日が」やフニャ「船が」は淡路島方言の「融合形」を表す。詳しくは中澤光平（2011）を参照。
[10] 実際の音調は [ノボッ]タ だが，動詞アクセントの体系上促音に核を認めず ¯ノボ'ッタ と解釈する。
[11] 有核の音調が古形だとすると，*ヨ[ン]ダ > ヨン[ダ]] (> ヨン[ダ) のような変化が想定される。

ところが，これに加え，五段活用の一部の動詞の終止形を H1 で発音する話者がいた。今までの共通調査項目としてそのような傾向が見られたのは，「痛む」，「動く」，「腐る」，「零す」，「刺さる」，「示す」，「育つ」，「靡く」，「挟む」，「分かる」の 10 語である[12]。表 4 に，このような有核型が安定して観察された三原 71 歳男性の型を「育つ」を例に示す。

表 4　3 拍有核型のアクセント（「育つ」）

	現在・終止	現在・連体	否定・終止	過去・終止	過去・連体
V	¯ソ'ダツ	¯ソ'ダツ (¯ト'キ)	¯ソダ'タン	¯ソ'ダッタ	¯ソ'ダッタ (¯ト'キ)

3 拍五段活用動詞の終止形において，上の 10 語の一部が有核型で現れたのは，東浦 80 歳女性，北淡 86 歳女性，一宮 81 歳女性 a，洲本 73 歳男性，洲本 83 歳女性，洲本 91 歳女性，五色 80 歳男性，五色 94 歳女性，緑 78 歳男性，三原 71 歳男性，西淡 70 歳男性，西淡 77 歳男性，南淡 62 歳女性，南淡 63 歳女性，南淡 76 歳男性，南淡 77 歳男性，南淡 78 歳男性，南淡 97 歳男性である。地域ごとに単純動詞で有核が現れた話者の割合をまとめると以下のようになる。

表 5　動詞に有核型が現れる話者の割合

		有核で現れた話者の割合
現淡路市	淡路	0/1　(0%)
	東浦	1/4　(25%)
	北淡	1/2　(50%)
	津名	0/2　(0%)
	一宮	1/3　(33%)
現洲本市	洲本	3/3　(100%)
	五色	2/2　(100%)
現南あわじ市	緑	1/1　(100%)
	三原	1/1　(100%)
	西淡	2/2　(100%)
	南淡	6/6　(100%)

洲本，五色，緑，三原，西淡，南淡の話者は全員有核型が現れたのに対し，淡路，東浦，北淡，津名，一宮では全く確認できないか，もしくは一部の話者でのみ現れた（ただし，淡路，緑，三原はそれぞれ 1 名しか調査していない）。さらに，淡路，東浦，北淡，津名，一宮で有核型が多くの語で観察できたのは東浦 80 歳女性のみであり，他の地域では数語に見られただけで，しかも無核の型との併用であった。傾向として，南部の地域では有核型がよく見られ，北部で

[12] この他に自然談話において，「省く」，「混ざる」も共通して有核型で現れた。

は現れにくいと言え，かつその境界は現在の行政区画と一致する傾向が認められる。

4．2　3拍五段活用動詞のアクセントの違いに関する考察

現淡路市にあたる地域を北部，現洲本市を中部，現南あわじ市を南部とここでは呼ぶことにする。北部でH0，中・南部でH1で現れる五段活用動詞は，金田一語類[13]で3拍2類の動詞に属するものである。平安時代末期の漢和辞典で当時の京都のアクセントを豊富に伝える『類聚名義抄』では，3拍動詞2類の連体形（現代諸方言の終止形と連体形に対応）が 平平上 と記録されている。この音調は ○○[○ に近いと推定され，室町時代頃に中央式では [○]○○（H1）に変化した。後に京都市，大阪市などの近畿中央部では類推により [○○○（H0）に変化した。すなわち，¯○'○○（H1）＞¯○○○=（H0） という有核型から無核型への変化が起こった。それに対し，淡路島全域で終止・連体形がH0となる動詞は3拍動詞1類に属し，『類聚名義抄』で連体形が 上上上 と記録されている。この音調は [○○○ に近く，京都市，大阪市でも淡路島でもH0の型で現れる。すなわち，北部のアクセント型は，京都，大阪中央部と同様に3拍動詞2類が無核型で現れ，これは中井幸比古（2001）に示される神戸市のアクセントと一致するのに対し，中・南部のアクセント型は室町時代のアクセント型を保っている。このようなH1のアクセントは，中井幸比古・高田豊輝・大和シゲミ（1999）における徳島市方言高年層のものと一致し，少なくとも北部では神戸市方言など京阪神地域と地理的に連続した変化をしている可能性を示唆し，南部では徳島市方言などの影響により古形が保たれている可能性がある。

ただし，活用形によって有核型の現れやすさに傾向差があった。有核型で現れやすいのは，現在・終止形，過去・終止形，過去・連体形および命令形 ¯○'○○ であった（無核の場合命令形は ¯○○'○ ）。それに対して，否定・終止形や現在・連体形では ¯○○○ン= ， ¯○○○ =¯ト'キ のように無核型で言うことが多かった。何故，活用形に応じて核の現れやすさに違いが現れるかについては未考である[14]。

3拍動詞の有核型は淡路島では五段活用の動詞にのみ見られるのに対し，徳島市方言では，低起式の一段動詞の終止形がL0以外にH1でも発音される（中井・高田・大和1999）。筆者は淡路島の南淡と鳴門海峡にて隣り合う徳島県の鳴門市方言でも，60代以上の話者で同様の傾向があることを現地調査にて確認した。（例「降りる」鳴門 [オ]リル：淡路 オリ[ル ）。淡路島方言ではこのようなアクセントは観察されず，本州の京都市，大阪市，神戸市といった京阪神地域と，四国の徳島県との中間的なアクセントとなっている。

また，体系的な調査は行っていないが，終止形が4拍の単純動詞の有核型に ¯オ'サエル「抑える」 と ¯コ'ワレル「壊れる」の2語が複数の話者で確認できた。ともに1拍目に核がある。5拍以上の単純動詞の調査は行っていない。

---

[13] 現代諸方言と文献資料から，古い日本語において同じアクセントを持っていたと推定される語彙をまとめたもの。これを類別語彙と言い，金田一春彦（1974）が具体的な形にまとめたため通称として金田一語類と言う。

[14] 低起式の連体形に推定される *ヨ[ン]ダ ＞ ヨン[ダ]]＞ ヨン[ダ（L0） という変化や，一部の話者に見られた ハ[タ]ケ「畑」（L2）に対する ハタケノ[ツ]チ のように，強い単語結合の場合，前部要素が無核化するのと関係があるかもしれない。

4．3　複合動詞のアクセント

複合動詞においても，一部の語で有核型が観察された。以下に，三原 71 歳男性の複合動詞のアクセントを示す。

表6　複合動詞のアクセント

1拍+2拍	着込む	[キ]コム	見張る	[ミハル
	寝込む	[ネ]コム	出会う	[デ]アウ
1拍+3拍	寝過ごす	[ネス]ゴス	出歩く	[デアルク
	見上げる	[ミアゲル	見守る	[ミマモル
1拍+4拍	し損なう	[シソコナウ	見届ける	[ミトドケル
	寝転がる	[ネコロガル	見続ける	[ミツヅケル
2拍+2拍	飛び乗る	[ト]ビノル	打ち合う	ウ[チ]アウ
	呼び出す	[ヨ]ビダス	書き足す	カキタ[ス
2拍+3拍	振り回す	[フ]リマワス	持ち歩く	モチアル[ク
	泣き叫ぶ	[ナ]キ[サケブ	駆け巡る	カケメグ[ル
	言い返す	*[イイカ]エス*	飛び起きる	[ト]ビオキル
3拍+2拍	砕け散る	[ク]ダケチル	動き出す	[ウ]ゴキダス
	覗き見る	[ノゾキ]ミル	叩き割る	[タ]タキワル
3拍+3拍	襲い掛かる	*[オソイカ]カル*	稼ぎ回る	[カ]セギ[マワル
	思い直す	*[オモイナ]オス*	睨み付ける	[ニラミツケル
3拍+4拍	走り続ける	[ハシリツヅケル	動き始める	[ウゴキハジメル
	隠し損ねる	カクシソコネ[ル	狙い定める	[ネ]ライ[サダメル
	送り届ける	[オクリトドケル	思い焦がれる	[オ]モイ[コガレル

（m 拍+n 拍の m 拍は前部要素の連用形の拍数，n 拍は後部要素の終止形の拍数を表す。）

1 拍目に核があるものが多く，表では以下の語が該当する。

[キ]コム，[ネ]コム，[デ]アウ，　[ト]ビノル，[ヨ]ビダス，[フ]リマワス，[ト]ビオキル，[ク]ダケチル，[ウ]ゴキダス，[タ]タキワル

前部要素が 1 拍の場合，後部要素が 2 拍で低起式の動詞だと全体で H1 になる（ コ[ム，ア[ウ ）が，3 拍以上ではそうなっておらず（ モ[ツ ＋ アル[ク → モチアル[ク ），一般化が難しい。

前部要素が 2 拍の高起式の場合，全体が H1 になる（ [トブ ＋ [ノル ，　[ヨブ ＋ ダ[ス ，[フル ＋ [マワス ，[トブ ＋ オキ[ル ）。表の語以外にも [引]き出す，[飛]び出す などが同様の組み合わせになっている。

前部要素が 3 拍の H1 型の場合，全体も H1 になる（ [ウ]ゴク ＋ ダ[ス ）。一方で [ウゴキハジメル のようにそうなっていない例もあり，2 拍の場合ほど規則的には現れないようだ。

それ以外で前部要素に核が現れる例として ウ[チ]アウ，[ノゾキ]ミル がある。

前部と後部がともに2拍の低起式であれば2拍目に核がある（ ウ[ツ ＋ ア[ウ ）。表以外に得られた 打[ち]込む，受[け]取る も同様の組み合わせである。

[ノゾキ]ミル は前部要素に核があるが，[ノゾク の連用形は [ノゾ]キ なので [ノゾ]キミル が期待される。この [ノゾキ]ミル という音調は，[ノゾク の連用形が無核化した [ノゾキ が ミ[ル の前に付いた [ノゾキ ＋ ミ[ル （ [ノゾキ]ミ[ル ）という2単位の形に近い音調であると言える。2拍+2拍より長くなると，[カ]セギ[マワル のように明確に2単位形になるものが現れる。

[ネス]ゴス ，[イイカ]エス ，[オソイカ]カル ，[オモイナ]オス は後部要素に核がある。[ネス]ゴス の後部要素 [ス]ゴス から推定すると，1拍+n拍の組み合わせの場合，後部要素がH1であれば全体がH2になると考えられる。後部要素が「返す」の場合，…カ'エス の形になることが多く，前部は式のみが残る（ [イウ ＋ [カエス ）。[ナ]オス は他に [イイナ]オス という例がある。表以外では「通す」も同様に …ト'オス の形になる（ [貫きト]オス ）。

前部要素が2拍低起式，後部要素が高起式無核という組み合わせの場合は全体が低起式無核になる（ カ[ク ＋ [タス ， カ[ケ ＋ [メグル ，「持ち運[ぶ（ モ[ツ ＋ [ハコブ ）」）。

複合動詞の前部要素が有核型で現われる例が確認できたのは，五色80歳男性，五色94歳女性，緑78歳男性，三原71歳男性，西淡70歳男性，西淡77歳男性，南淡62歳女性，南淡63歳女性，南淡76歳男性，南淡77歳男性，南淡78歳男性，南淡97歳男性である。ただし，五色では大部分が無核化しており，[ネ]スゴス，[ウ]ゴキダス など数語見られるのみであった。有核型の複合動詞のアクセント型は，中井・高田・大和（1999）の徳島市方言の高年層の型と一致するものが多い。北部では2単位形が調査の範囲内では現れず，またほとんどの複合動詞を無核で読み上げた。ただし，「言い返す」や「貫き通す」など，後部に核が現われる例は北部でも確認できた。

複合動詞の終止形の無核型は，単純動詞の場合と同様に有核型から変化したと考えられ，南部の方がアクセント体系においては古形を保存する傾向にあると言えるが，五色では90代の話者ですでに有核型の衰退が見られ，複合動詞の方が単純動詞よりも核を失う傾向があるようだ。

5．まとめと考察

淡路島方言は，動詞のアクセントにおいて南北で違いが見られ，北部では終止・連体形が一般に無核であるのに対し，南部では有核で現れるものがある。京阪神地域に地理的に近い北部では，京阪神地域おけるアクセントの変化に連続するものとして，有核から無核へ変化した，あるいはしつつあると考えられる。その場合，京阪神地域から遠い南部の方が古形を保っていることになる。一方，一段動詞では徳島市方言や鳴門市方言のような有核型が見られないなど，淡路島全域で共通した特徴もある。何故，淡路，東浦，北淡，津名，一宮という地域において，有核から無核への変化が早く進行したのかについては今後考察する必要がある。無核型への移行は四国の若年層でも進行しているため，世代差も考え得るが，今回の調査では80代以上の高齢層においてすでに北部で無核化の傾向が見られるため，世代差による違いとは言い難い。

6．今後の課題

現在の調査では，特に複合動詞に関して有核型で出る条件などを考察できる程には情報がまだ揃っていない。今後調査語彙数を増やし，淡路島全体でのアクセント体系をより具体的に明らかにしていきたい。

また，南部でも3拍2類の動詞が全てH1型で出るわけではなく，北部同様H0型になっている語もあった。逆に，北部においても，東浦80歳女性は3拍2類動詞の2割程度をH1で発音した。歴史的な要因をさらに追及する必要がある。

また，今回は対象としなかったが，東浦75歳女性では，3拍以上の低起式一段活用動詞の現在・否定形が有核型で出た（ 浴[び]ん，逃[げ]ん，降[り]ん ）。五段活用では無核である（ 持た[ん，歩[かん ）。このような点についても，今後調査していきたい。

参考文献

上野善道（1992）「昇り核について」『音声学会会報』199: 1-14.

――（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130: 1-42.

興津憲作（1990）『淡路方言―特徴・語法・アクセント・語彙』旧津名郡一宮町：兵庫県立淡路文化会館.

鎌田良二（1982）「兵庫県の方言」『講座方言学7　近畿地方の方言』: 229-252. 東京：国書刊行会.

高橋顕志（1982）「淡路島の方言」『講座方言学7　近畿地方の方言』: 253-276. 東京：国書刊行会.

田中萬兵衛（1934）『淡路方言研究』旧津名郡洲本町：福浦藻文堂書店.

中井幸比古（2001）『兵庫県南部方言アクセント小辞典』神戸：神戸市外国語大学.

中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』東京：勉誠出版.

中井幸比古・高田豊輝・大和シゲミ編（1999）『徳島市方言アクセント小辞典』神戸：神戸市外国語大学.

中澤光平（2011）「淡路島方言における『助詞「が」・「は」の融合形』とその音韻的解釈」『日本方言研究会第92回研究発表会発表原稿集』: 1-8.

楠宜田竜昇（1986）『淡路方言の研究』神戸：神戸新聞出版センター.

Regional Variety of the Verbal Accent System in Awaji-shima Dialect

NAKAZAWA, Kohei

Keywords: Awaji-shima dialect, accent, simple verbs, compound verbs

Abstract

The present author conducted fieldwork on the accent system of the Awaji-shima dialect in Hyogo Prefecture as spoken by the older generation, aged of over 60, in 2010-2011. Based on the obtained data, the accent system of verbs is as follows: (1) the accent system of the Awaji-shima dialect has a lowering kernel, as well as 2 types, high-register and low-register, just like the modern Kyoto dialect. (2) Group 2 (classified by Kindaichi word.groups) of the three-mora verbs are generally kernelless in northern Awaji-shima, while they have a kernel at the initial mora in the rest. (3) Compound verbs are kernelless in the north (and central) areas of Awaji, while in the south some verbs have a kernel. As to the second and third points above, the kernelless type in the north agrees with that of the geographically adjacent Kobe type (or Keihanshin type), while the kerneled type of the south goes with that of the Tokushima-shi dialect. Thus it seems likely that the Keihanshin type influenced the process of the accentual change in the north.

（なかざわ・こうへい　修士課程）